

## 7. 点検評価と課題

昨年度に引き続き Graham Fleming 教授 (Univ. California, Berkeley, USA) と柳田敏雄特任教授 (阪大) に研究顧問をお願いし、所全体の研究評価、研究体制についての提言をいただいた。また外国人運営顧問である Stephen Berry 教授 (Chicago University, USA) と Peter Wolynes 教授 (Rice University, USA) に研究活動評価等をお願いした。

Graham Fleming 教授は光化学研究の世界的リーダーであるのみならず、現在 UC, Berkeley 校の研究担当副学長を兼務されている。また Lawrence Berkeley National Laboratory (LBL) の副所長も務められた経験があり、世界の研究の動向、研究の運営、施策に精通している。Fleming 教授は 2011 年 10 月に約一週間、分子研に滞在し、各研究リーダー (PI; 教授および准教授) からのヒヤリングを行い、また各研究室を訪問し実際の実験のようす、装置の現状などを視察した。前年度からの分を含めると、Fleming 教授による研究所全 PI のヒヤリングと評価が完了した。また Stephen Berry 教授は理論化学の先導者の一人であり、米国科学アカデミーの副会長を務めるなど、世界の科学動向に詳しい米国科学界の長老である。2 月 7 日から 5 日間分子研に滞在し、相当数の研究グループ PI からの研究ヒヤリングをおこなった。

両教授の、ヒヤリング、研究室訪問、分子研の運営・将来計画の検討にもとづく評価、提言は、本 7 章にレポートとして掲載してある (ここに公開されているもの以外に、所長宛に非公開の個別 PI 評価がある)。そこには、全体の研究レベルは相当高い水準にあり、特に、世界的に見ても飛び抜けたレベルにある研究グループが相当数あることが示されている。しかし、所内研究グループ間 (研究所外との専門的な協力研究は盛んだが) の共同研究が少ないこと、それが領域を乗り越えた大きな研究の展開を阻んでいる可能性があるのではないかと指摘がなされている。これに対して Fleming 教授からは、研究所内共同研究を盛んにする施策等、パークレイ校の研究改革の経験に基づく提言をいただいている。

これらの評価以外にも、各年度末 (1 ~ 2 月) に、グループリーダー (PI 教授および准教授) による研究発表会 (所長ヒヤリング) を実施してきた。今年は、2012 年度予算の決定が遅くなったため、この 4 月に、研究顧問の柳田敏雄特任教授にも参加いただき、ヒヤリングを実施した。

(大峯 巖)